

行事の時期を見直して 学校生活にリズムを作り 生徒の自立心を育てる

茨城県立多賀高校は、3年間を見通したキャリア教育を実施している。行事もキャリア教育の体系に組み入れ、実施時期を見直した結果、生徒の学校生活のリズムが生まれてきた。

主体性を重んじる伝統が 意欲の低下を招く

茨城県立多賀高校は茨城県北部の日立市にある中堅の普通科高校だ。2005年度から、3年間を見通したキャリア教育体系の構築を進めてきた。この背景には、いわゆる学校の荒れがあった。同校の進路実績は90年代の中頃までは堅調に推移し、中堅進学校として地域からの信頼も厚かった。ところが、2000年代に入って生徒の気質が徐々に変化し、問題行動が目立ち始めた。当時

を知る2学年主任の松田貴先生は、その原因を次のように話す。

「バンカラで自由な校風が本校の伝統でした。しかし、教師が生徒の自由を尊重するあまり、多くの生徒が自由と自分勝手を履き違えるようになりまして。進学や部活動の実績が低迷し、志願者数も減りました。定員割れと学力低下の繰り返しという悪循環に陥っていたのです」

数字に表れる以上に深刻な問題だったのは、生徒の学校生活全般に対する意欲の低下だった。

「一生懸命に頑張る生徒が馬鹿に

される風潮がありました。生徒は最初に勉強や行事に取り組むのが恥ずかしいと言うようになり、退廃的な雰囲気为学校から活気を奪っていたのです」と松田先生は語る。

実施時期を見直し 行事の質と効果を高める

活力ある学校を取り戻すため、同校が進めたのが3年間のキャリア教育の体系化だ。生徒指導・特別活動・進路指導を3本柱に、生徒の自己効力を高めながら自立を促す仕組みだ(図1)。主に特別活動で実施される

「行事」は、適切な「子ども性の発揮」と位置づけた。ビジョン委員会委員長の長山祐司先生は、行事の意義を次のように説明する。

「教師が学校生活も学習も厳格に指導するだけでは、生徒は学校がつまらないと感じます。生徒指導で厳しくする分、行事や部活動で発散させて、先生や生徒同士が良い関係を築くことで、学校への帰属意識を高めたいと考えました。行事は、学校生活のリズムをつくると共に、良い学校文化をつくるためにも不可欠なのです」

茨城県立多賀高校

◎「文武不岐」を校是とし、文武両道を目指す。2004年度に教育改革に着手。05年度から体系的なキャリア教育の体制を構築。09年度卒業生は、高い進学実績だけでなく、進路未定と非正規雇用者が1%にまで減少した。

設立 1953(昭和28)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 (1学年) 約280人

10年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、茨城大、都留文科大、会津大に計11人が合格。私立大は、常磐大、明治大、駒澤大などに延べ214人が合格。

住所 〒316-0036 茨城県日立市鮎川町3-9-1

電話 0294-33-0044

Web Site <http://www.taga-h.ed.jp/>



茨城県立多賀高校
廣木喜博 Hiroki Yoshikuro
教職歴19年。同校に赴任して8年目。2学年副主任。「物差しづくり（シラバス）が重要と考えています」



茨城県立多賀高校
長山祐司 Nagayama Yuji
教職歴18年。同校に赴任して10年目。ビジョン委員会委員長。「人間力のある生徒を育てたい」



茨城県立多賀高校
松田 貴 Matsuda Takashi
教職歴28年。同校に赴任して15年目。2学年主任。「できることからコツコツ」



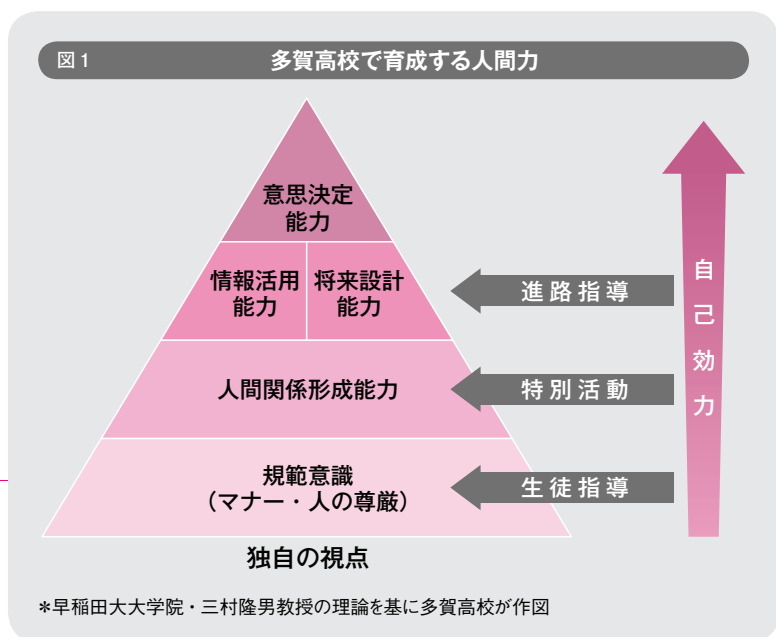
茨城県立多賀高校
小川次郎 Ogawa Jiro
教職歴14年。同校に赴任して3年目。特活部長。「教育では生徒への情熱が何よりも大切」



茨城県立多賀高校
田代 寛 Tashiro Hiroshi
教職歴20年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。「校訓の精神を生徒にしっかり伝えていきたい」

かつてはこの指導の流れに一貫性がなかったと、09年度までビジョン委員会委員長を務めた廣木喜博先生は指摘する。

「進路指導、教科指導、部活動の指導と、教師がそれぞれの立場で必



要なことを行っていたため、大事な場面で行事が重なってしまうことがありました。面談と進路ガイダンス、部活動と課外が重なり、優秀な生徒を学校内で奪い合う状況が生じていたのです。キャリア教育の構築に当たり、それぞれの取り組みの効果が最大限に発揮されるよう、定期

調査や模試、面談、学校行事などの時期を適切に配置するところから検討を始めました」

例えば、進路ガイダンスは例年6月に実施していたが、その月には面談やクラスマッチがあるため、5月に移動。文化祭は、推薦入試受験者の増加に対応するため、11月から9月に早めた。部活動は1年生の9月までは全員加入を原則とした。

また、行事で学校生活のリズムをつくる工夫もしている。同校では前期と後期（同校は2期制）に各1回、「ピーク」となる行事を配置した。前期のピークは6月第1週のクラスマッチ、後期は9月第3週の文化祭・体育祭である。

「子ども性を発揮し、学習に前向きに

生徒の自己効力を高めるためにどう手を掛けるか

取り組ませるためには、ピークは年2回が適切だと考えました。特に6月は入学やクラス替えの直後で、クラスを一つにまとめるきっかけがほしい時期です。クラスマッチは時期的にも内容的にも、クラスの結束を固める上で欠かせない行事です」（長山先生）

実施時期と共に重要なのは、行事の中で生徒が達成感を得られる場面をどれだけ多く設けられるかという点にあると、特活部長の小川次郎先生は説明する。

「自分たちにはこれが達成できた」という経験を足場にし、生徒は次に何が出来るかを考えられるようになります。その足場がしっかりしたものであればあるほど、次のステップに進みやすくなる。これが生徒の自立につながると考えます」

だからこそ、行事を成功に導かなければならないと、小川先生は強調する。その最たる行事が、6月のク

ラスマッチだ。全校生徒がサッカーやテニスなどの競技から一つを選択し、2日にわたってクラス対抗で戦う同校最大の行事である。かつて、競技はトーナメント戦だったため、1回戦で敗退した生徒はそこで競技終了となっていた。そこで、予選はリーグ戦とし、最低2回は出場できるようににした。更に、1日目で負けて競技が終わった生徒は、翌日に別の競技に出場できるようにした。

2日目の最後には、閉会式の会場となる体育館で、競技別に参加していた生徒が全員集まり、クラス対抗の綱引きを行う。クラス全体、学校全体が一つになり、体育館は割れんばかりの歓声と熱気に溢れる。これも、生徒に達成感を味わわせるための工夫の一つだ。

運営面では、生徒自身に任せる場面を数多く設ける。競技の審判は同一種目の運動部に所属する生徒が行う。1年生も審判員となるが、盛り上がりやすい2・3年生の試合は、経験豊富な3年生が取り仕切る。競技の記録は新聞部、開会式や閉会式は放送部が行うなど、文化部の生徒が活躍する場面も設けた。

教師の役割として、生徒が自己効力感を得られるように、生徒に気づかれないよう手を掛けることもあると、松田先生は話す。

「私たちがある程度のお膳立てをした上で、生徒に任せられるところは任せる。生徒の主体性や行動力を見て、どこまで生徒に任せるのかを見極めることが大切です」

行事が育んだ一体感が強い集団をつくる

行事を通して培われた生徒同士の信頼関係が自立への大きな一歩になることも、同校では珍しくない。進路指導部長の田代寛先生は次のように話す。

「自信が持てずに一人ではなかなか前に進めなかった生徒も、友だちとの信頼関係の中で自然と一歩を踏み出せることがあります。それがすぐに学習意欲につながるといいうわけではありませんが、行事を通して得た周囲との連帯感や自信が、前向きに頑張ろうという意識をつくり出すのだと思います」

卒業生の一人は自身の体験を次のように振り返る。

「3年生の文化祭では、クラスの出し物としてお化け屋敷を企画しました。どうすれば怖くなるか、面白くなるかをみんなで考えるうちに、クラスが一つになっていくのを感じました。仲間同士で支え合う雰囲気生まれて、勉強をおろそかにしている友だちがいれば注意するようになり、自分が勉強に身が入らなるときは、逆に友だちから『しっかりしろ』と励まされたこともありました。友だちの支えがあったからこそ、つらい受験勉強も乗り切れたのだと思います」

「自立とは、生徒同士の支え合い

の中で一人ひとりの心が強く育っていくことなのかもしれません」

生徒の姿を見て、長山先生はこのように述べる。

「本校の行事は、キャリア教育の観点から見ても、生徒の自立を促す上で効果的であると自負しています。本校の実践が伝統的な行事の在り方と比べて、特に目新しいわけはありません。一つひとつの行事の持つ価値を見直し、学校教育が本来持っていたノウハウをしっかりと生かしていくこと、そして何よりも大人が子どもとしっかりかわることが大切なのではないでしょうか」

図2 特別活動における行事の位置づけ

		特別活動	
		人間関係形成能力	
		あらゆるシーンでやり遂げた経験を多く積み、自己効力を高め、進路決定のためのやる気と自信、そして実行力、体力を身に付けさせていく	
		学校行事	部活動
1 年 次	他 律	・クラスメートとの人間関係の構築 ・教師との人間関係の構築 ・学校が楽しい(子どもの性の発揮)	・フォローシップ ・挨拶・礼儀 ・言葉遣い ・忍耐力 ・謙虚さ・まじめさ
		・遊びを通して協力の大切さを学ぶ ・主体的に自分の役割を果たす ・互いに尊重し合う態度を養う	・自分の役割に気づく ・個性の伸長 ・個性の発揮 ・チームへの貢献 ・創意工夫 ・向上心
2 年 次	自 律	・共に協力し支え合う態度を養う	・リーダーシップ ・的確な判断力 ・自己のマネジメント ・自信
3 年 次	自 立		
狙い		コミュニケーションを進化させ、良き学校文化を創り出す	

部活動・行事で培われる力を示した図。教科指導、生徒指導、進路指導領域に関してもすべて同様に作成している

*学校資料を基に編集部で作成